
CALPIS

days

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

CALPIS

【Nコード】

N0127I

【作者名】

days

【あらすじ】

少年アレンジは、特別な眼を持っていた。それは、見た人間の感情と話ができるというものだった。そのせいでアレンジは孤児院から出れなかった。人と違うと虐げられる、だから引き取り手が来なかった。その孤児院でもいじめにあっていて、部屋のはずべて壊されていた。そんなときに、アレンジの部屋にティータイムという青年が入ってきた。その青年の野望に関係させてくれという頼みで、何とか外にできることができたのであった。ティータイムのチーム『RE:Rtea』に入り、依頼を通じて感情の真の姿を人々に

教えていく

Story 1：ここが居場所

「またね」

少年は、孤児院から出て行く子供に笑って手を振った。

少年よりも小さいその子は、決して笑っていなかった。

最後に、無理して笑ってくれたが、同時に涙を零していた。

ハッと、隣の高価な服装をした貴族の男の人に気づかれないうちに、涙を拭って、俯いた。

少年は、決してほえむことをやめなかった。それが、たとえその子を傷つけているとしても、少年はやめなかった。

少年は、孤児院から出たかったから。

小さな孤児院に、その少年はいた。ネズミの住処のように汚く、何年も掃除をしていないような部屋に、少年は住んでいた。

他の部屋はちゃんと綺麗に清掃されていて、小さい孤児院にしては高価に見える。

部屋に戻り、汚らしい部屋の掃除を始めた。少年は掃除がうまく、30分もすれば部屋は周りの高価に見える部屋に劣らない綺麗さになった。

だが、それは瞬間でしかない。窓から水が飛び散り、泥団子などを投げ入れられた。

綺麗だった少年の部屋は、瞬間で水に濡れ、泥でぐちゃぐちゃにされてしまった。

窓の外から歓喜の声が聞こえた。

孤児院の子供だ。その子供たちは、毎日のように少年の部屋を汚し、少年の大切な物を壊

していった。だが、少年は怒らなかった。むしろ笑っ

て、子供たちを部屋から見下ろした。

Story 2

少年の部屋の前を、何人もの子供が騒ぎながらかけて言った。

「なあ知ってるか？ハイトがこの孤児院出るんだって！」

さっきの子供とは違う奴らだ。少年が孤児院から出たいことを知っていながら、子供たちは騒いでいるのだ。

最近、孤児院から出て行く人が増えた。

引き取り手が見つかり始めたんだ。

確かに良いことだが、自分は一生でれない、そんな気がしていた。部屋から出て、ハイトの元に向かった。ハイトは、この孤児院で唯一の友達だからだ。

ハイトは、玄関にいた。

「おめでとう」

少年は、また笑って言った。

「・・・ごめん」

ハイトは振り返って、少年に深く頭を下げた。

「何だよ？」

少年はしゃがんで、ハイトの肩を押して無理矢理頭をあげさせた。

「俺まで出て行っちまったら、お前は・・・」

「大丈夫。毎日楽しいよ」

少年は万遍の笑みで言ったつもりだったが、ハイトは見抜いてしまった。

「本当に、悪い。俺も夢がある。こんな所では叶わない夢が！」

ハイトの目には希望があった。きらきら輝いていて、

眩しいくらいの。

少年は羨ましかった、自分にはないその輝きを持つているハイトがだ。輝きが羨ましかったわけではない。

ハイトが羨ましかった。

自分も、こんな輝きがあれば　ここからでれるかもしれない。そう思ったからだ。

ハイトを呼ぶ声が、外から聞こえた。甲高い声で、優しく呼びかけている。

その人は、子どもが幼い時に亡くなり、ハイトとかぶせて見ているらしい。

ハイトは以前から、そこに行きたくないと言っていたが、ここよりはいいと思ったのだろう。

だが、少年はたとえそこでも喜んで行きたかった。ここにいたくない。それが後先考えずに出て行けと言っているのだ。

「じゃあな」

「うん、じゃあね」

少年は、今度は笑わず、ハイトに手も振らなかった。振りたくなかったのかもしれない。振ることが別れの儀式なら、もう会えないかもしれない。

いや、もう会えない。少年がここから出ない限り、一生会うことは出来ない。

なぜ自分に話が来ないのか不思議でしうがなかった。周りの子には何回も話が来ているのに、自分は一回もない。むしろ、孤児院の外に出たこともない。なぜ自分を引き取る人が1人も来ないのか。それが気になって仕方なかった。

少年はこの時、唯一の友達を失った。これでもう、かばってくれる人間はいなくなった。少年は笑う。諦めを示して。

Story 3

部屋に戻ると、部屋は掃除前より荒れていた。泥や水、手鏡などが割れていた。

手鏡は、少年が初めて貰ったものだった。名前や顔は思い出せない誰かから貰ったものだ。

その人は、少年に会いにきたわけではなかったが、ずっと1人で孤児院の掃除をやらされて

いた少年に、初めて優しくしてくれた人だった。

その鏡は、最初で最後のプレゼントだった。

それ以来、少年を優しく見てくれる人は1人も来なかった。

少年は、手鏡の破片を集めた。

そして無言で、ただひたすら手鏡の枠に押し込めた。

今まで、この鏡だけはずっと守ってきた。

石を投げられるたびに、少年は鏡をかばって石に当たっていた。

少年は、初めて悔しいと思った。表情に丸きり変化はないが、拳が固くなってきている。

拳が震え、破片を割れるくらい強く握っていた。

少年は、窓の外の連中に部屋にあるすべてを投げてやりたかった。

大切なものはもう全て壊れてしまった。

もうこの部屋にあるものに意味はない。

だが、できない。むしろ、またしようがないと思って笑ってしまっそうだ。

その理由はある。自分にある、特別な能力についてだ。

だが、これが特別人に害を及ぼすものではない。

いや、もはや誰にも見せたことがない。

つまり、引き取り手が来ないこととは関係ないということだ。

少年は、部屋を出た。孤児院さえ飛び出したかった。

こんな自分だけひどい扱いを受けているんだ。嫌になって当然だ。

Story 4

と、考えてみた。

実際はまったく嫌という気がない。

いや、今無くなった。体から湧き上がる気持ち、ゼロになるように抜けていき元に戻っていく。

そして、今はもはや晴れやかな気分だ。どんな殺人者でも許してしまえばいい。気持ち開放的だった。そんなこと、許してはいけないが。

また部屋に戻った。落ちている破片を丁寧に拾い上げ、机の上に置いた。

気がつくと、手はガラスの破片で血だらけになっていた。

だが、この手を孤児院の誰に見せても心配もしてくれない。

子供に見せたら、触ってもとぐちやぐちやにしてしまうだろう。丁寧に服で破片の血を拭いた。痛みを我慢しながらだったせいで、手が震えてしまっただけで破片が落ちてしまう。

何とか破片から血を拭いて、机にまとめた。

改めて破片を見ると、なぜだかひっかかることがあった。

なんだかおかしい。破片にヒビが1つもなかった。よく見ると、割れ方に統一性もあった。

まるで、血が拭きやすいように割れているようだった。

だが、気にしても鏡が直るはずがない。気にして直ってしまうほど世の中イカれてはいない。

少年は汚らしいベッドに横になり、天井を眺めた。

ドロが所々についていてシミになっているその天井だけが、頻繁には汚されない唯一の場所だった。

天井が 妙に高く触ることが出来ないため掃除できないから、天井だけは一度も掃除したことがない。

その天井を眺めながら、なぜ自分に部屋があるのかとも思ってしまった。

うほど、少年は頭を悩ませていた。個人部屋があるというところで、皆から省かれている気がしてきてしまう。

個人部屋がなければ、みんなと同じところなら仲良くできるんじゃないか？

みんなと同じ状況・環境で生活していれば自然と友達になって、いじめなんてなくなるんじゃないかと思った。

他の子たちは違う部屋で寝たり、同室だったり、少年とは違う環境なのだ。

同室がいい。そう思い始めた時だった。

「失礼するよ」

カチャリと、ドアが開いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0127i/>

CALPIS

2010年11月2日14時47分発行